

10. 神並・西ノ辻遺跡の遺構と遺物



▲羽釜棺墓検出状況（神並遺跡）



▲棺に転用された羽釜と皿（神並遺跡）



▲川から出土した甕・杯・皿・高杯
（西ノ辻遺跡）

飛鳥時代

この時代の遺構は、神並遺跡で羽釜棺墓が1基だけ知られている。出土地は、石切神社の南から北に通じる参道より少し東である。建物など居住域を直接示す遺構は確認されていない。

西ノ辻遺跡では遺構が発見されていないが、両遺跡の境にあたる東端付近を流れていた河川の中や包含層中より土器がかなり出土している。付近に集落が存在したことは間違いない。

おそらく法通寺（現在の石切神社付近にあった飛鳥時代末期から室町時代の寺院跡）の存在や、前代の古墳時代集落と次の奈良・平安時代の集落の立地から推定すると神並遺跡の今回調査した地点の北側に存在したものと考えられる。実態の解明は今後の課題である。

羽釜棺は飛鳥時代末期（7世紀末～8世紀初め）に、日常煮沸に使用していた土器と食器の皿を転用して組み合わせて棺としたもので、地面に穴を掘って葬っていた。羽釜は在地産で、皿は他地域で作られたものである。この種の羽釜は中南河内地方以外では、祭祀に用いられることが多くセットとして製作された竈とともに都をはじめとする各地にもたらされている。

遺物は当時、食器として用いられた須恵器の杯や高杯、土師器の碗や高杯と煮炊きに使われた土師器の甕、羽釜や貯蔵に使われた須恵器の甕など出土している。（福永）



▲字が書かれた墨書土器(神並遺跡)



▲須恵器、円面硯(西ノ辻遺跡)



▲井戸から出土した土師器・須恵器(神並遺跡)



▲製塩土器(西ノ辻遺跡)

奈良時代の神並・西ノ辻遺跡

掘建柱建物や倉庫、井戸などが石切神社に南から入る参道のやや西、東西70m南北25mの狭い範囲で検出されている。西ノ辻遺跡との間に流れる川の北岸にあたる場所で、井戸は川岸近くに作られていた。

掘建柱の柱穴は中世とは異なり1辺約80cm前後の堀方をもつ平面形が隅丸方形をした大きなものが見られこの時代の建物の特徴を示している。柱は残っていなかったが、痕跡から径20cm程度のものが使用されていたと推定される。6棟が確認され内2棟は廂が存在したようである。大きな建物で約18㎡の広さがある。倉庫は束柱を持つ建物で面積15㎡と7.7㎡の2棟が検出されている。建物は主軸の方位が異なり2時期にわたって存在したようである。

井戸は平面が1辺2.7mの隅丸方形、深さ3.2m以上の穴を掘りその中央にほぼ正方形に板を組んで1辺90cmの井筒としたものである。井戸枠に用いられた板の1枚に「南」と墨書されたものがある。井戸内からは、奈良時代後期の須恵器・土師器などが出土し中には「長福」「池」と墨書されたものも見られる。集落は、調査地の北に広がるものと考えられる。

墓は、前代の羽釜棺と隣接した位置から1基同様の棺が検出されている。

西の辻遺跡では、奈良時代中頃に流れていた川から小型の土師器甕・甑・ミニチュアの高杯・穴のあけられた小型の壺・須恵器壺・国産の小型海獣葡萄鏡・木製の人形などの祭祀遺物がまとまって出土した。包含層からは土馬も出土している。竈・甑・甕は川の北岸から投げ込まれており、周囲には小型の甕が

散乱していた。出土地は西流してきた川が、北西に蛇行する地点で、川の中に水流を調節するために幅約5mの範囲に杭を多数打ち込んだ出口付近である。

この祭りを行ったのは、位置から見て東に隣接する神並遺跡にすんだ人々と考えられる。村外れの川岸で都と同様の律令国家が定めた祭の方式を忠実に守り祭を行ったのであろう。これは、いたことを示している。また、海辺から塩を入れる容器としてもたらされた製塩土器や須恵器の円面硯なども出土している。

(福永)



▲国産小形海獣葡萄鏡(西ノ辻遺跡)



▲祭りに使われた木製人形(西ノ辻遺跡)



▲土馬(西ノ辻遺跡)



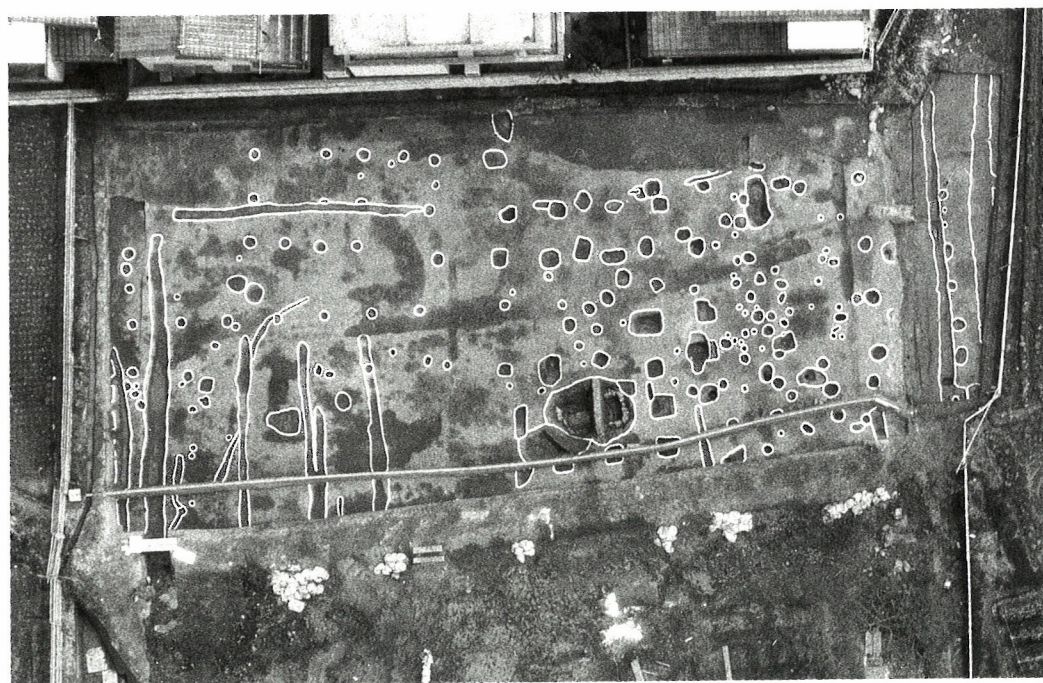
▲河辺の祭りで使われた土器(西ノ辻遺跡)



▲掘立柱建物検出状況(神並遺跡)



▲柱穴根石検出状況(神並遺跡)



▲平安時代集落跡検出状況(神並遺跡)

平安時代前期・中期の神並・西ノ辻遺跡

この時代の集落跡は、神並遺跡で奈良時代の掘立柱建物のすぐ西に隣接して検出されている。遺構は掘立柱建物・溝・柵などである。掘立柱建物は前期（9世紀）が3棟（床面積18.9㎡、16㎡他）で内2棟は総柱の倉庫と考えられる。中期（10世紀前半）は1棟（床面積34.7㎡）で円形の柱穴をもち中には根石をもつものがある。溝は、畑作に伴うもので柵は建物の敷地を区画するために設けられたと考えられている。

今まで調査が行われた地は、前代同様に当時の集落の西南にあたる地で、中心は北に広がると考えられる。10世紀後半以降11世紀前半までの遺構は検出していないので奈良時代に居住を開始しこの時期に、居住地を替えたようである。南に隣接する鬼塚遺跡でも最近、9世紀半ばに居住地を替えている。

西ノ辻遺跡では、旧170号線のすぐ西側で

溝が1条検出されている。溝内からは、灰釉陶器・緑釉陶器・土師器・須恵器・黒色土器のほか「大満」「知」と墨書された土師器も出土しているが、神並遺跡と一連の集落と考えられる。

神並遺跡の南を流れる川からは、大阪府下では珍しい中国製の越州窯青磁の鉢や、富寿神宝などの皇朝十二銭の数種類が出土している。

神並・西ノ辻遺跡で検出された奈良時代からこの時代までの建物跡は、出土遺物の種類に多様さと位置関係から見て石切神社の社域に存在する飛鳥時代（7世紀後半）の創建された法通寺に関連した富裕層の住む集落と考えることができる。同寺所用の瓦が遺構や包含層から出土していることもこれを裏付けている。

（福永）



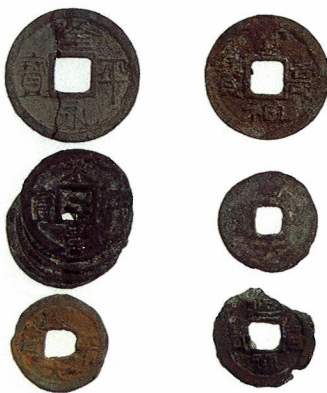
▲当時の日常雑器、土師器・黒色土器
（西ノ辻遺跡）



▲国産緑釉陶器・越州窯青磁
（神並遺跡）



▲字の書かれた墨書土器(西ノ辻遺跡)



▲平安時代の皇朝十二銭(神並・西ノ辻遺跡)

平安時代後期の神並・西ノ辻遺跡

この時代の遺構は、井戸、土壇、ピットが発見されている。集落を構成する建物の復元は困難であるが、遺構の分布から見て、現在の新石切駅東端を中心に集落が営まれていたものと考えられる。井戸には方形の算木を組んで木製の井戸枠を作ったものがある。方形の木枠を備えた井戸は奈良時代から平安時代前半によく見られ、平安時代後半には素掘りの井戸が多くなるので、この井戸は、この時代としては丁寧に作られた立派な井戸といえる。井戸の底の水溜めとなる部分には曲物枠の側板を据えているものが多い。



▲曲物井戸検出状況(西ノ辻遺跡)



曲物井戸の底部(西ノ辻遺跡) ▶



▲算木を組んだ井戸(西ノ辻遺跡)

この時代の食器の組み合わせは、黒色土器に変わって新たに登場した瓦器碗と、大小2つの大きさの土師器皿を基本とする単純なものである。

ここで成立した基本的な食器の組み合わせは、南北朝時代まで続く。これに、中国製の白磁碗、瓦器小皿などが加わる。瓦器碗は極めて細い粘土で薄手に作られ、口縁部に沈線が巡らされた大和産とやや粗い粘土で作られた河内産の両方が用いられているが、大和産のものが8～9割以上と圧倒的に多い。土師器皿には、口縁部を外側に折り曲げた後、上方につまみ上げる独特の器形の小皿をはじめ京都の土師器皿の形をまねたものが多い。中には京都で作られたと思われるものもあるが、ほとんどは河内産である。煮炊に用いられる土器は、土師器羽釜である。羽釜には鐏が付いているが、竈にかけるのではなく、五徳に載せて鍋のように使用する。土師器の羽釜にも大和産と河内産のものがあり、瓦器碗と同様に、大和産のものが多い。調理用の鉢は、東播磨の神出窯（神戸市）で生産された須恵器鉢が、貯蔵用の壺や甕は神出窯産の須恵器のほか、この時代の終わりには常滑・渥美窯産の陶器がもたらされるようになる。このように、日常使用する土器類は河内、大和といった近郊ばかりでなく、播磨（兵庫県）、尾張、三河（愛知県）などの遠方からもたらされているのである。（森島）



▲瓦器碗、小皿・土師器大、小皿(西ノ辻遺跡)



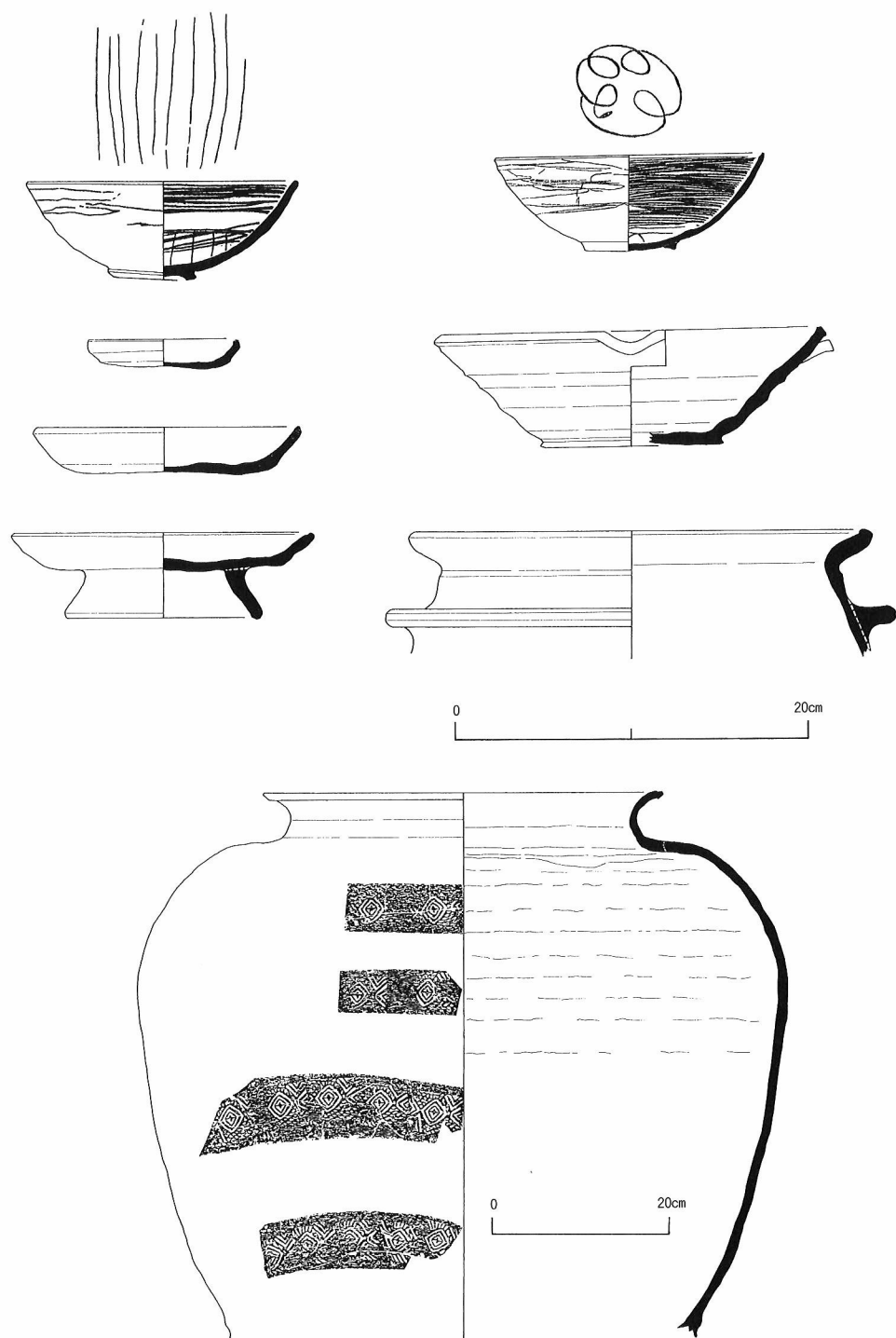
▲東播系須恵器捏鉢(西ノ辻遺跡)



▲土師器羽釜(大和型)(西ノ辻遺跡)



▲常滑焼甕(西ノ辻遺跡)



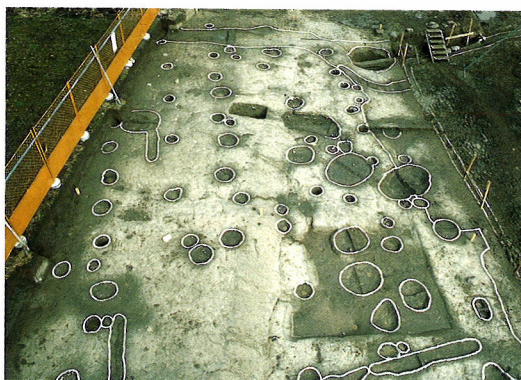
▲瓦器碗・土師器大、小皿、台付皿・釜・東播系須恵器捏鉢・常滑焼甕実測図(西ノ辻遺跡)

鎌倉時代の神並・西ノ辻遺跡

この時代の遺構は神並・西ノ辻遺跡のほぼ全域にわたって広がっており、平安時代後期と比べて集落が拡大していることがわかる。主な遺構には、柱穴、井戸、土壇、墓などがある。

この時代の西ノ辻遺跡の村は南東から北西に流れる川の北と南の両方で発見されている。川には堰を設けて治水が行われていた。川を埋めた土の中からは多量の土器、木製品などのほか、馬、牛、犬などの動物の骨が多量に見つかる。特に馬の骨が多く、何頭分もがまとまって見つかることもある。このように、川は耕作に必要な水を得る他に、廃棄物の処理場でもあった。

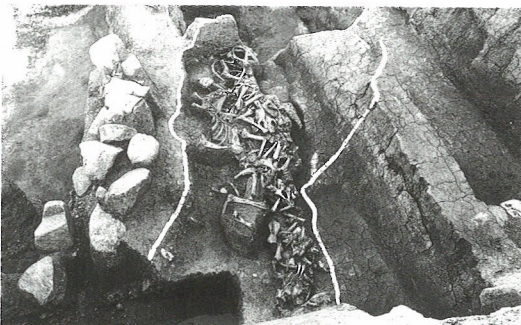
この時代の建物は簡単な掘立柱建物である。柱穴が集中して見つかる場所があり、建物が何度も建替えられたことがわかるが、柱穴の数が多すぎて建物の形を復元することはできない。柱穴の多くは直径30cm足らずの円形で、中には柱根の残っているものや、柱穴の底に礎石を据えたものもある。



▲井戸・掘立柱建物検出状況(神並遺跡)



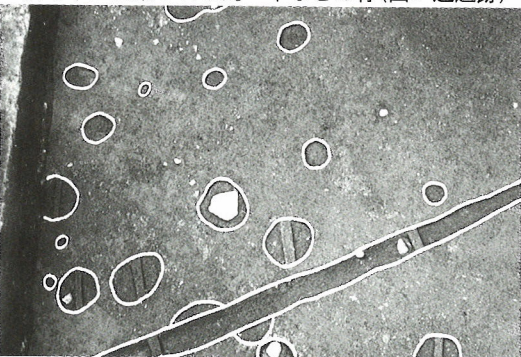
▲堰検出状況(西ノ辻遺跡)



▲溝の中に遺棄された馬・牛などの骨(西ノ辻遺跡)



▲根石検出状況(西ノ辻遺跡)



▲瓦器出土状況(西ノ辻遺跡)

井戸は井戸杵を用いない素掘りの井戸である。これは、市内の平野部で発見されるこの時代の井戸の多くが、底の抜けた羽釜を積み重ねて井戸杵に転用したものであることと対照的である。沖積平野に比べてしっかりしている山麓の地盤を反映したものであろう。井戸を埋めた土の中からは遺物が多量に出土することがある。ときに、完形品を含む瓦器碗を多量に投棄していることがあり、井戸を埋めるときに行うお祭りに関係するものかもしれない。また、井戸の底では木製品が腐らずに残っていることが多い。



▲井戸検出状況(神並遺跡)



▲土器検出状況(神並遺跡)



▲井戸断割り状況(西ノ辻遺跡)

西ノ辻遺跡で発見されているこの時代の墓は、全て土葬墓であり、いずれも北枕で埋葬されている。墓は特定の場所に集中するのではなく、集落内のあちこちに点在していることから、屋敷地内に営まれる屋敷墓であると考えられている。現在の新石切駅西端では東西に並んだ2基の土葬墓（木棺墓）が発見された。2基とも骨がよく残っていたので、北枕で埋葬されたこと、東側が40代の男性、西側が40代の女性であることなどがわかった。男性の方は土師器大皿1、土師器小皿6が女性の方は中国製の青磁碗1、土師器大皿1、土師器小皿4が、副葬されていた。副葬品から見て、男性が先に埋葬されており、女性が埋葬されたのは、少なくとも20～30年後であると考えられるが、隣りあって埋葬された2人は、近しい親族なのだろう。



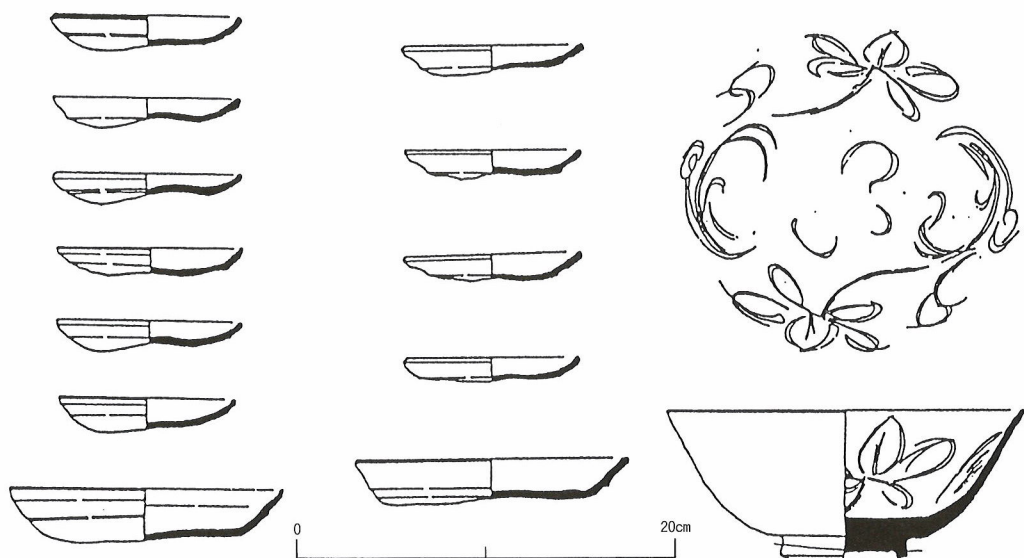
▲木棺墓副葬土器(西ノ辻遺跡)



▲木棺墓副葬青磁碗・土師器皿(西ノ辻遺跡)



▲土葬墓検出状況



▲土墳墓副葬品実測図(西ノ辻遺跡)

この時代の食器は、平安時代後期以来の瓦器碗と大小の土師器皿の基本セットであるが、瓦器碗はこの時代を通じて急激に小さくなり、容量は1/3に縮小してしまう。瓦器碗の生産地別では大和産が全体の6割～7割前後であり、その割合は前代より減っているものの、依然として河内産よりも多くを占めている。しかしながら、この時代の末には河内産のものの割合が急激にふえ、約9割を占めるようになる。中国製品は青磁碗が輸入され、名主などの有力者層に使われた。煮炊具は土師器羽釜の他に、この時代の後半には瓦質の三足羽釜が現われる。三足羽釜は平安京や淀川流域の地方では平安時代末から見られるが、この地域ではほぼ、鎌倉時代後半に限ってみられると断言はできない。口縁部に段をもつ瓦質羽釜も同じ頃に現れるが、量が多くなるのは次の南北朝時代を待たなければならない。

壺、甕、鉢は、前代に引き続いて東播磨や東海産のものがもたらされている。



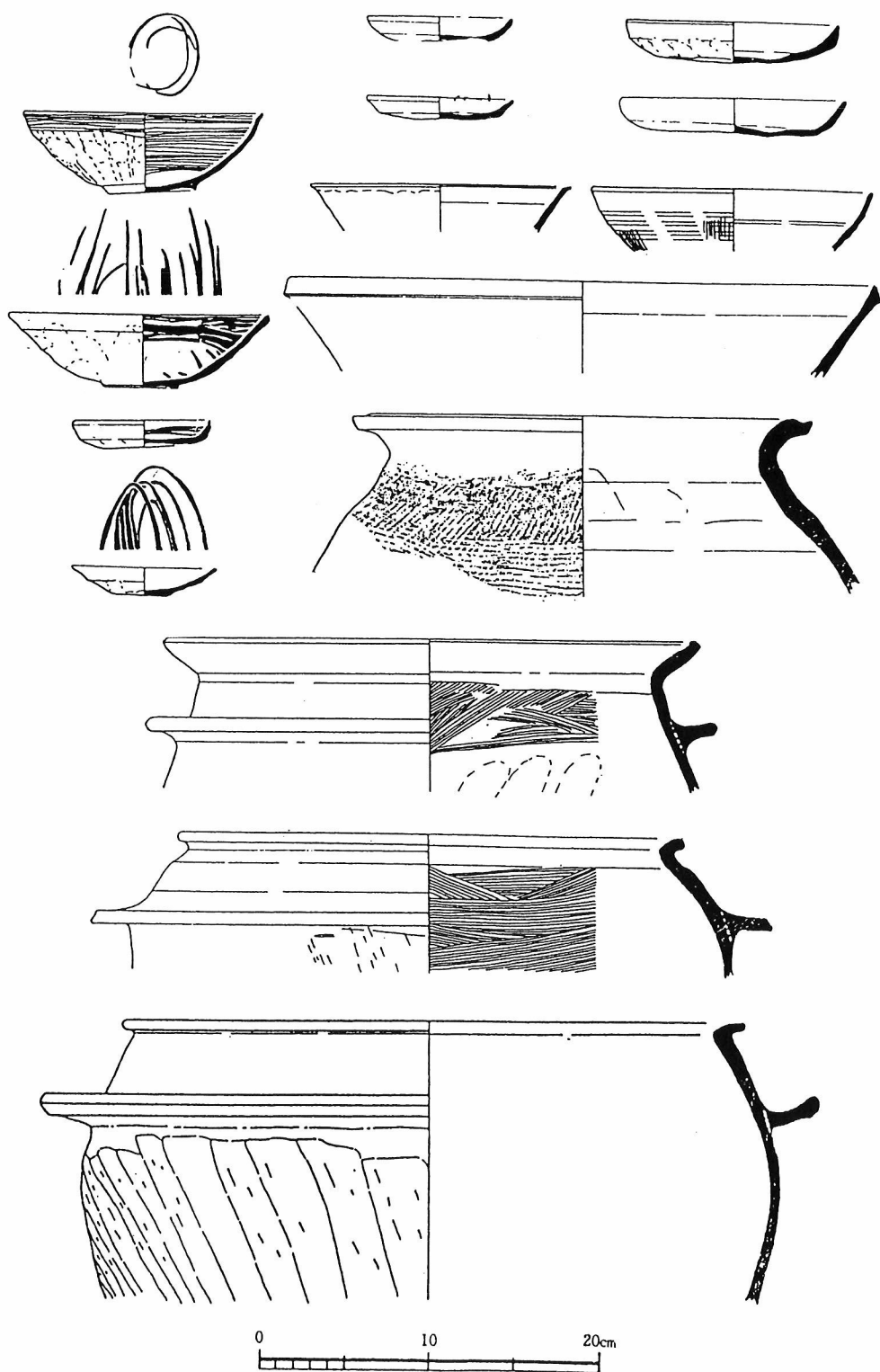
▲大和型瓦器碗、皿・土師器大、小皿(西ノ辻遺跡)



▲和泉型瓦器碗・土師器皿(西ノ辻遺跡)



▲東播系捏鉢(神並・西ノ辻遺跡)



▲瓦器碗、皿・土師器大、小皿・土釜・東播系捏鉢、甕実測図(神並・西ノ辻遺跡)



▲土師器羽釜(西ノ辻遺跡)



▲瓦器三足羽釜(西ノ辻遺跡)



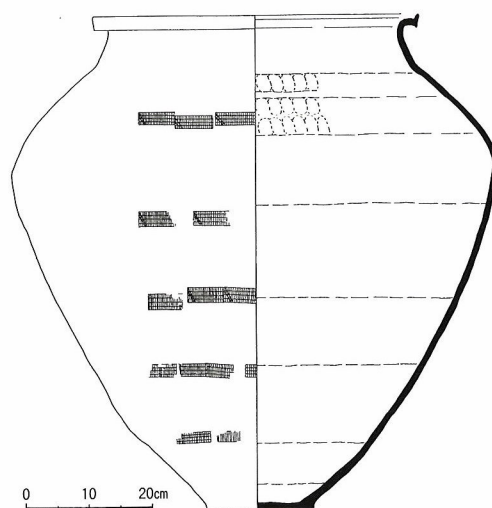
▲土師器大、小皿(西ノ辻遺跡)



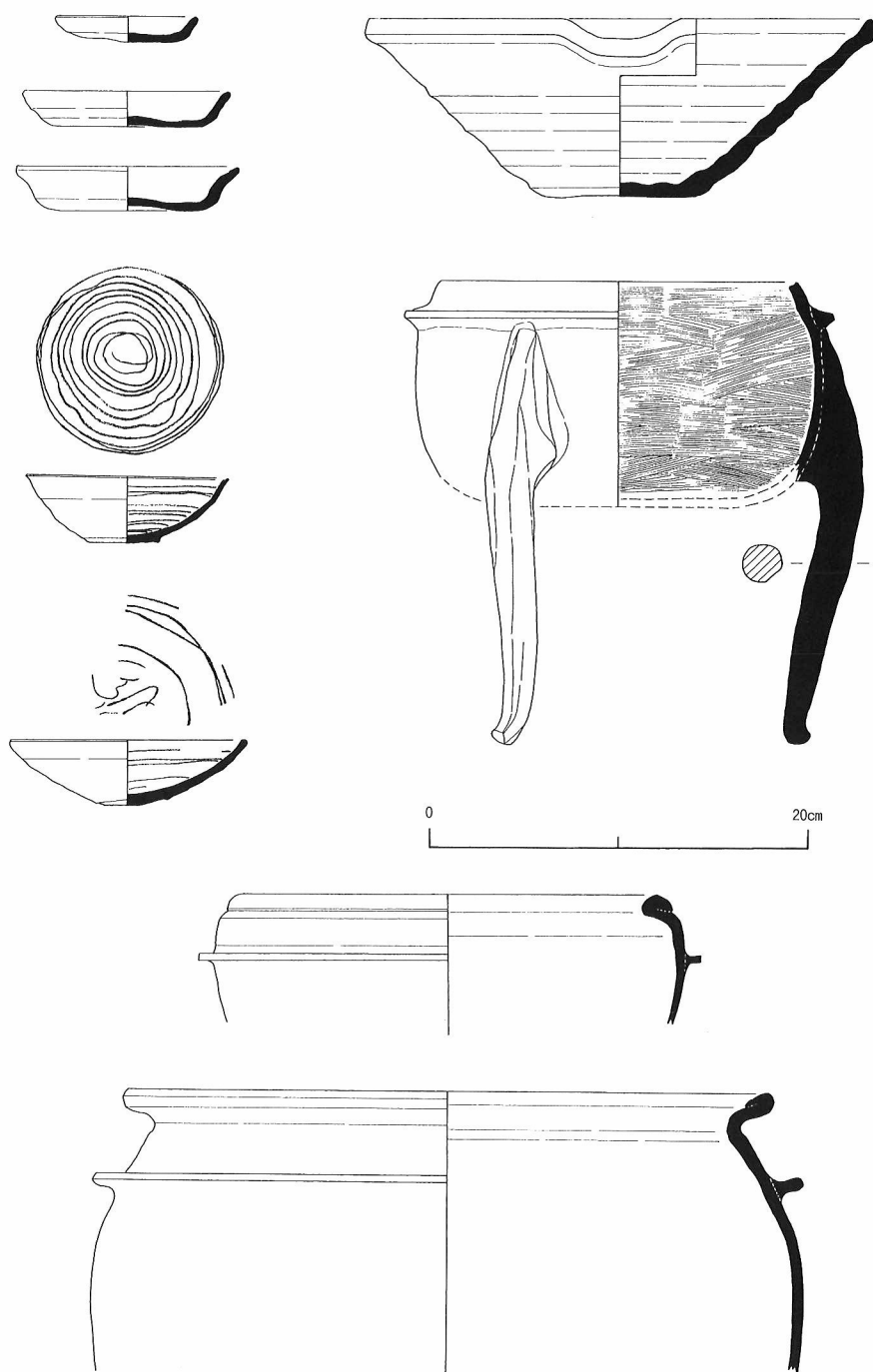
▲大和型瓦器碗(西ノ辻遺跡)



▲備前焼小壺・瓦器甕(神並・西ノ辻遺跡)



▲常滑焼甕実測図(神並遺跡)



▲土師器大、小皿・大和型、和泉型瓦器碗・東播系捏鉢・大和型、和泉型土師器羽釜実測図
(神並・西ノ辻遺跡)

今回の調査では木製品が多量に出土したことも大きな成果であった。西ノ辻遺跡からは、この時代の下駄、釣瓶、曲物桶、鎌、ホッケーのような遊びに使われる木球、俵や筥を編むときに使用する菰桁やつちのこなどが見つかった。これらの多くは、農村では近年まで日常的に使われていたものとほとんど同じ形をしており、私たちの生活用具がこの数十年の間に著しく変化したことを実感させるものであった。西ノ辻遺跡の鎌倉時代の井戸から出土した木簡には「蘇民将来子孫宅也」と墨で書いてあった。これは、疫病よけのまじないとして広く行われていたもので、現在でも祇園祭のお札などに残っている。

西ノ辻遺跡では中世の耕作溝が見つっているが、村の人々は農業のほか、漁労活動も行っていた。漁網の錘に使用する土錘はさまざまな大きさのものが出土するが、最も多量に見つかるのは長さ3cm位の紡錘形のもので、投げ網に用いられたのではないと思われる。

(森島)

- 1 釣瓶(西ノ辻遺跡)
- 2 下駄(西ノ辻遺跡)
- 3 呪符木簡(鬼虎川遺跡)
- 4 鎌(西ノ辻遺跡)



▲絵図に見られるざっちょう



1



2



3



4



5



6

5 木球(西ノ辻遺跡)

6 土錘(西ノ辻遺跡)

南北朝時代の神並・西ノ辻遺跡

南北朝時代になると鎌倉時代より遺構の数は少なくなる。この時代の遺構には井戸、土塋、溝などがある。

この時代は平安時代後期以来続いてきた食器の基本セットに変化が見られる時期である。瓦器碗は容量をさらに縮小し、出土量も減少して、この時代のうちに消滅する。このことは漆器碗の出土量が増えることと関係しているように思われる。土師器皿は底が上に突き出した「ヘソ皿」と呼ばれるものが見られる。煮炊具は瓦質羽釜が多くなり、河内産の土師器羽釜はない。大和産の土師器羽釜は依然として使われているが、機能を失った鏝は凸帯状に退化し、やがて消滅して名実ともに鍋になってしまう。平安時代以来使われてきた東播磨産の須恵器鉢も生産されなくなり、大和産と和泉産の瓦質播鉢がこれにかわる。大和からは外面に菊花のスタンプ模様を押した火鉢ももたらされている。これは奈良火鉢として全国的に流通していたものである。木製品では曲物桶の他に結桶が使われるようになっている。珍しい遺物としては古代以来まじないに使われてきた人形が発見されている。

(森島)



▲ 井戸検出状況 (西ノ辻遺跡)



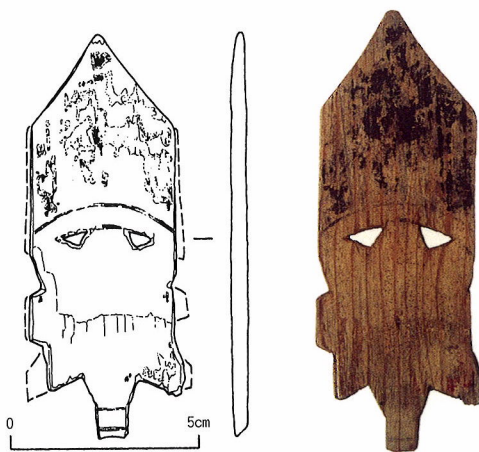
▲ 土塋遺物出土状況 (鬼虎川遺跡)



▲ 人形出土状況 (西ノ辻遺跡)



▲ 土師器・瓦器羽釜 (西ノ辻遺跡)



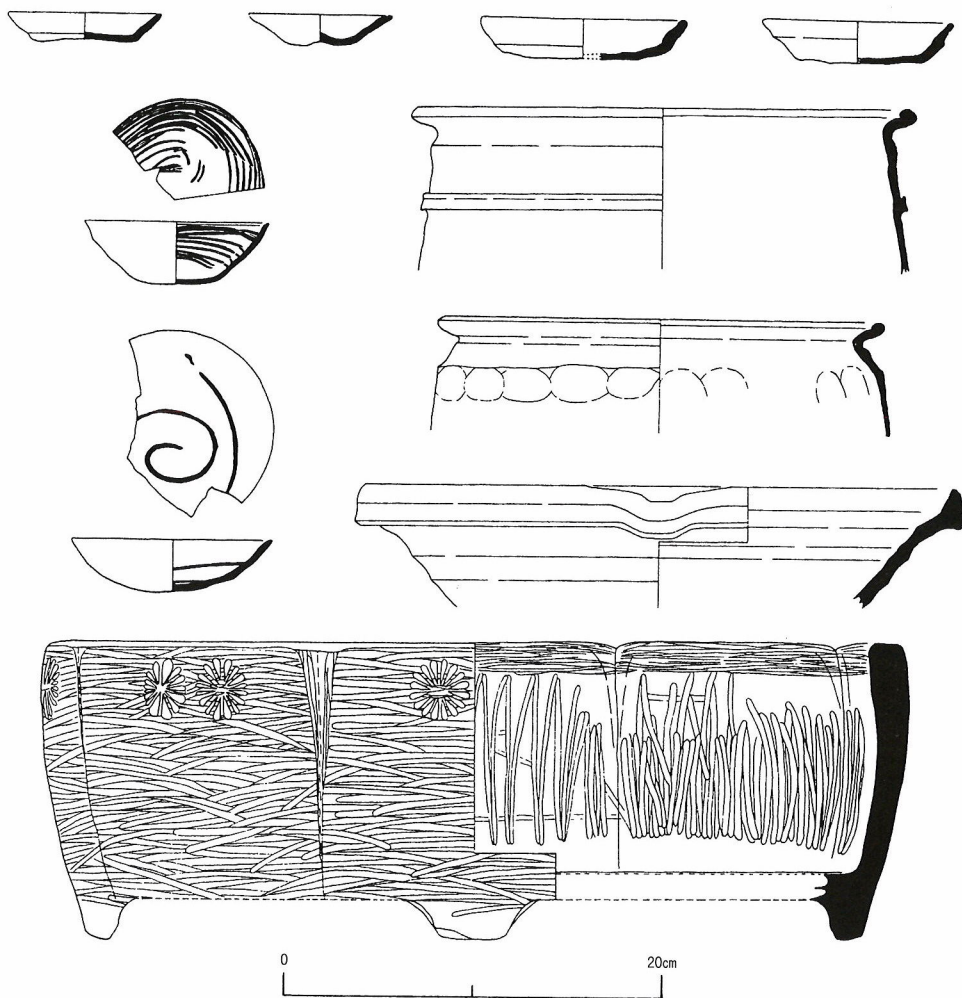
▲ 人形実測図・写真 (西ノ辻遺跡)



▲井戸出土瓦器火舎、椀・土師器大、小皿
(西ノ辻遺跡)



▲東播系捏鉢（西ノ辻遺跡）



▲井戸出土瓦器火舎、椀・土師器大、小皿、羽釜・棟播系捏鉢実測図（西ノ辻遺跡）



▲土師器大、小皿・瀬戸美濃産天目茶碗（鬼虎川遺跡）



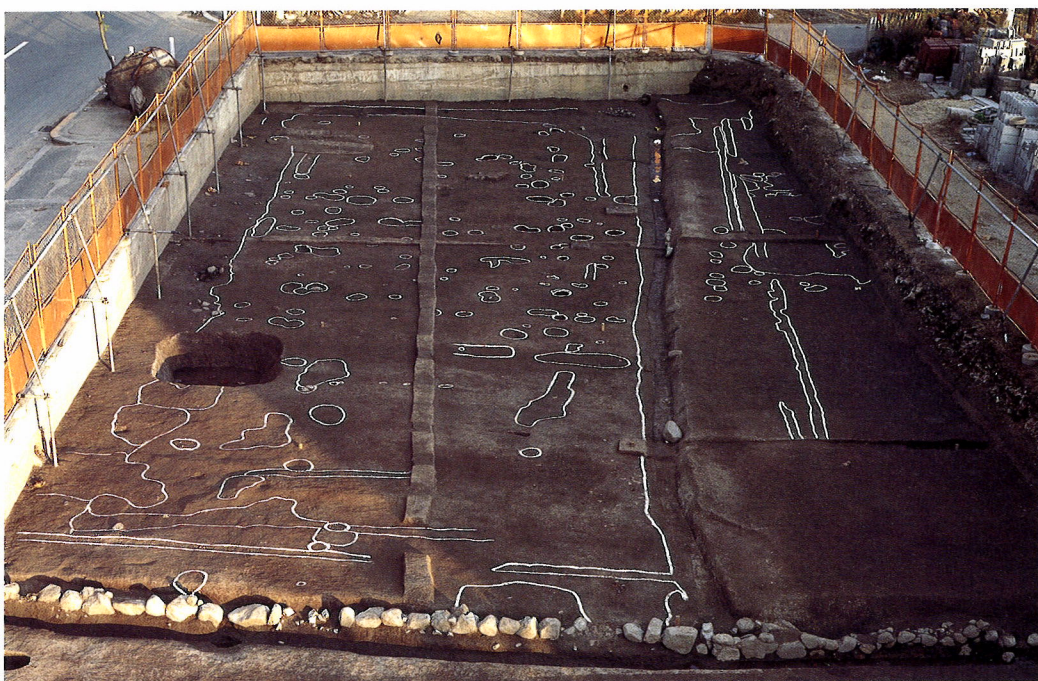
▲土師器・瓦器羽釜（西ノ辻遺跡）

室町時代の神並・西ノ辻遺跡

神並遺跡ではこの時代の遺物は河川跡からは出土しているが、遺構として明確なものは検出していない。耕作地となったと考えられる。

西ノ辻遺跡からは掘立柱建物や井戸などが検出されているが、集落の中心は西側に移り鬼虎川遺跡の範囲に及んでいる。この時代の遺構は鬼虎川遺跡で検出された16世紀中頃の井戸を最後に無くなる。その後の居住地は、おそらく現在の旧村部に移り跡は、田畑に変化したようである。

日常雑器は、前代と変わらないが播鉢や火舎（火鉢）など碗・皿以外にも瓦器の製品が増える。播鉢は、陶器の備前焼や信楽焼は高価なためか数が少なく形を写した瓦器（大和型を主体に和泉型も存在）が多く出土している。また、喫茶の風習が伝わりお茶用の瀬戸・美濃産天目茶碗が見られる。（福永）



▲掘立柱建物検出状況（西ノ辻遺跡）



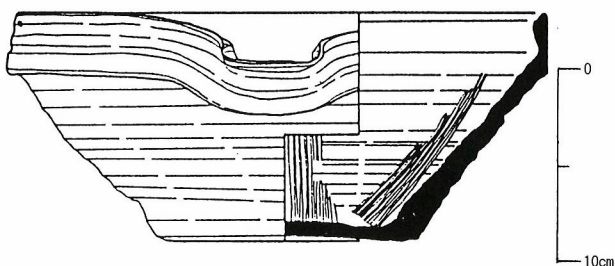
1



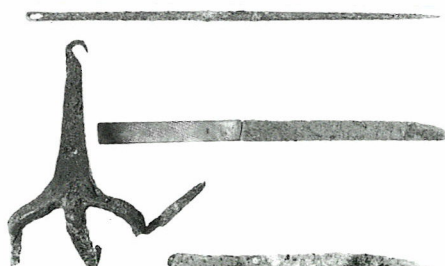
2



3



4 備前焼播鉢・瓦器播鉢実測図
(鬼虎川・西ノ辻遺跡)



5



6

- 1 土師器大、小皿（西ノ辻遺跡）
- 2 瓦器香炉（西ノ辻遺跡）
- 3 備前焼播鉢・瓦器播鉢（鬼虎川・西ノ辻遺跡）
- 5 刀子・熊手・火箸（西ノ辻・鬼虎川遺跡）
- 6 宋銭各種（神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡）